

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第39回 船上からの便り

Residence of Prince Asaka 1933—

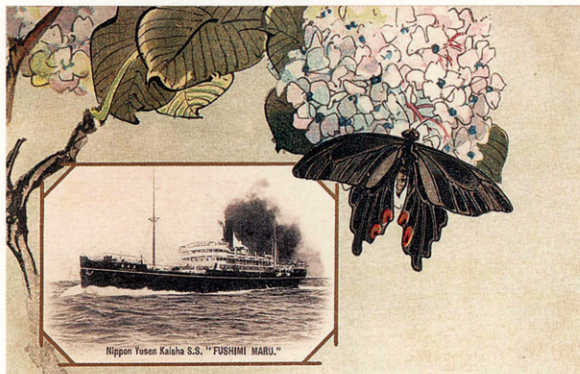


図1.日本郵船発行の伏見丸の絵葉書

1922(大正11)年10月30日、朝香宮鳩彦王は「軍事御研究」の名目で欧州へと旅立ちました*1。

欧米への渡航手段として客船による船旅が主流であった時代、日本からパリまでは約40日間を要し、その間鳩彦王は家族に向けて絵葉書を送りました。船旅の間に送られた22枚の絵葉書には、鳩彦王自身が見聞きし体験したものに関する

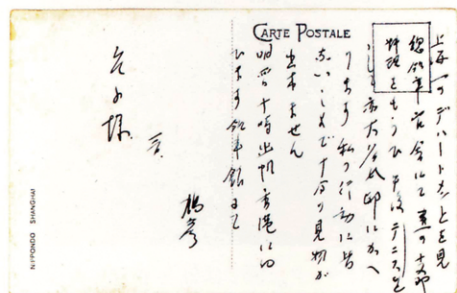


図2.上海に寄港した際の絵葉書

率直な感想が事細かに記されており、これらの絵葉書からパリまでの渡航の詳細を読み解くことが出来ます*2。

欧州航路の定期船・伏見丸に乗船した鳩彦王一行*3は、北九州の門司港を出発して最初の寄港地である上海を目指しました。航海の初め頃は海が荒れ、たえず床について食事を取ることが出来ないほどだったようです。上海に寄港した際は、デパート見物やテニスを楽しみ、揚子江を見て、まるで海のように感じた感想を述べています。

その後一行は、11月6日香港、11月13日シンガポール、11月16日ペナン、11月21日コロンボ、12月3

日スエズと順調に航海を続けました。各寄港地では、香港の夜景が一望できるヴィクトリア・ピークへ登ったり、コロンボで釈迦の歯が納められたとされるキャンディの仏蘭寺へ参拝したり、カイロでピラミッドやスフィンクスの見学をしたりと、一行の予定は大変忙しいものであったようです。

一見したところ観光のように見えるものだけでなく、現地の日本人小学校を視察したり、英総督の催す食事会へ

出席したり、エジプト国王から公式の出迎えを受けたりと、皇族としてこなさなければならぬ仕事が多くありました。絵葉書の中で鳩彦王は、自分の行動に大勢が付いて回るので十分に見物が出来ないとこぼしており、皇族ゆえの不自由さを感じていた様子が垣間見えます。

絵葉書には、寄港地についてだけでなく、船上での生活について触れているものもあります。允子妃宛の絵葉書には、「婦人多クノ船客ノ注意スル所ナル故態度並ニ服装ノ二点ハ畏モ注意スヘキ事ニ候」と書かれ、船上でのご婦人の過ごし方や衣服について説明する内容が見受けられます。また、運動会や仮装パーティなどの各種の催しが開かれ、長い航海も面白く過ごすことが出来たと書かれています。

スエズ運河を通過した一行は、地中海の港マルセイユで下船し、12月11日、鉄路で目的地であるパリに到着しました。(大木)

*1:明治以降、技術・知識の習得や文化交流を目的とした洋行が盛んに行われるようになり、鳩彦王の渡欧当時には皇族・華族の洋行は慣例化していました。鳩彦王は渡欧の翌年4月に北白川宮夫妻とドライブの途中交通事故に遭って大怪我を負い、その看病のため同年6月允子妃が渡欧しています。1925年7月に朝香宮邸建設のきっかけとなるアール・デコ博覧会を見学し、同年10月アメリカ経由で帰国の途に着きました。

*2:今回調査に使用した絵葉書は、東京都庭園美術館及び旧宮家関係者所蔵のもの。

*3:船旅には、御付武官・藤岡萬蔵少佐(後に中佐)、朝香宮事務嘱託・福葉三郎らが随行しました。



図3.ピラミッドとスフィンクスを背景に撮られた鳩彦王の写真



図4.コロンボ、キャンディにある仏蘭寺の絵葉書